

日本初の文化情報学部

—なぜ私はこの学部で働くようになったのか—

戸田 光 昭

駿河台大学文化情報学部は、日本で最初の「文化情報学部」として誕生した。まったく他に例のない、この新しい学部を創設する際には、その構想を当時の文部省に理解してもらうのに、大変なご苦労があったと聞いている。文化情報ということばだけで聞くと、文化関連の情報を扱うと誤解されがちであるが、この名称には深い意味があり、わかりやすくするため、情報資源学部という名称にする案もあったようである。

文化情報学とは、われわれの周辺に存在するあらゆる情報資源（あらゆるメディアに蓄積された記録情報をはじめ、アクティブな情報源としてのライブの映像や音響、さらには景観・観光資源なども含む）を対象として研究する学問分野であり、これらの情報資源の収集、保存、蓄積、検索、活用を専門的に扱うことのできる「情報メディアイーター」を養成することを目指すのが、文化情報学部である。

また、この学部の教育内容から考えると、4年制の学部だけでは不十分なので、最初から6年制のカリキュラムを構成しておき、学部と大学院研究科の一貫教育とすることが理想であるとし、文部省へ打診したという話も伺ったことがある。この6年制大学が生まれていれば、最近、新設されるようになった専門職大学院課程の始まりとして、日本の大学教育に大きな影響を与えるようになったのであろうが、成立しなかったことが残念である。

文化情報学部は2学科で設立され、文化情報学科と知識情報学科がある。これは、情報資源を文字情報（知識情報）と非文字情報（文化情報）に

二分するという考えから作られたものである。しかし、情報資源を文字と非文字に画然と分けるという考え方に、多少無理があった。その後、感覚情報と知識情報ということばで分けることも考えたが、これもじっくりしたものではない。また、情報資源をオリジナル情報とコピー情報に分けるという構想も示されたが、何がオリジナルであるかがますます不透明になっていく時代にあって、明確な区分が可能であるかどうか、課題は残っている。無理に2学科構成にする必要はないのであるが、学部定員を確保するためには、このような方法しかなかったとのことである。

『駿河台学園八十年史』（学校法人駿河台学園、1998. p. 198）には、次のような記述がある。

……一方に膨大な情報資源があり、他方に情報を必要とする多数の需要者・利用者が存在する——その中間にあって需要と供給を適切かつ有効に結びつけていく能力を備えた人材「情報メディアイーター」の養成を目指す。このためカリキュラムも大学設置基準の大綱化を先取りするかたちで、既存の学部とは異なった斬新な内容を盛り込んだ。そのひとつがオリエンテーション学期の開設。これは、一年次の春学期を大学教育の導入期間と位置付け、受験勉強などで習慣化した受動的・暗記中心の学習態度を、自発的な学習姿勢に転換することを目的とし、「資料検索法」「論文執筆法」「プレゼンテーション法」「研究調査法」科目を受講する。また、密度の高い学習を実現するため、ゼミナールを除くすべての

授業科目を半年単位で完結させる Semester 制を採用した。

次に、私自身のことについて、特に、なぜこの学部で働くようになったかについて述べる。私は駿河台大学文化情報学部に就任する前、兵庫県姫路市にある姫路獨協大学に在職していた。姫路市は兵庫県西部地区にあり、西播磨すなわち西播地区と呼ばれているところで、神戸よりは岡山に近く、魚の市場へ買出しに行くときは、岡山県の日生（ひなせ）へ出かけたものである。本当に住みやすい、温暖で魚も美味しく、人情味豊かな所であった。

そんな良いところにある大学から、しかも国宝姫路城の城下町で、新幹線も停車する大都市から、人口8万の小さな郊外都市である飯能に移住して来たのはなぜであろうか。

個人的な理由もあるが、それを別にして考えると、文化情報学部のカリキュラムが斬新なものであったことが大きな要因であった。前述のように、オリエンテーション科目を中心とする共通基礎科目群は、当時としては、国内最先端であったと言っても過言ではないほどに充実していた。研究調査法、論文執筆法、資料検索法、プレゼンテーション法、プレゼミナルなどをセットにして新入生の最初の学期に置いた大学は大変珍しかった。

このように斬新な学部における導入科目を新入生に受講させ、大学における研究や学習に慣れさせた上で、学部や学科の科目へ進むという方針に

賛同し、それを担当することが最初の仕事であったことが、文化情報学部へ就任する一番大きなきっかけであった。さらに学部全体のカリキュラムも斬新なもので、この学部のコンセプトを文部科学省（当時は文部省）の新設学部認可受付の窓口理解させるのが大変だったというエピソードを聞くと、ますますこの学部に愛着が湧いてくるのである。

こうして私は文化情報学部で働くことになったのであるが、学生も教員も新しい学部の一年生で苦勞することも多かった。しかし、最初の経験で楽しいことも多かったと思う。学生には申し訳ないこともあったが、共に貴重な経験をすることができ、後になって振り返ると、ありがたいことであったと、感謝の念で一杯である。

文化情報学部第1期生で、現在、情報サービス業界の第一線で活躍しているS君は、入試広報課が発行している駿河台大学案内ガイドブック2004年版へ、次のようなメッセージを寄せている。

「文化情報学部では、自ら課題を見つけ、それを調査し、レポートにまとめるという一連の流れを身につけ、一人で研究を進めることができるようにご指導いただきました。お蔭様で、このことが今の社会人としての私の活動を支えています。」

卒業生がこのように評価してくれたことは、学部のオリエンテーション科目が有効であったことの証拠であり、創設時の苦勞が実りつつあることに、あらためて、深く感謝したい。